

**主 題：忠実な管理者として生きる②****聖書箇所：マタイの福音書25章16-30節**

この朝続けて見ていきたいのは、マタイの福音書25：14-30です。タイトルにもあるように、先週から私たちは忠実な管理者として生きるということについて、イエス様の語った一つのたとえ話から学び始めました。先週、大切なことなので覚えておいてくださいとお願いした、24章と25章のたとえ話の背景は頭の片隅にでも入っていますか。イエス様がオリーブ山で十字架にかかる直前、地上での時間が残りわずかに迫っていた時に語られていたことばでした。イエス様は自分自身がこれから先、すぐに十字架にかかって死に、ご自分が救い主としての働きをなした後、勝利者としてよみがえって一度天に戻ることを、そしてまたいつか天から帰ってくることを弟子たちに何度も明らかにしていました。でもそれを前にして、まだわからないこともありました。それはイエス様が具体的にいつ帰ってくるのかということでした。イエス様は、その日は必ず来ます、でもそれがいつになるかはわかりませんと言うのです。私たちはみんなこの日を待っています。この日を待っている者として大切なことは、その時までどのようにして主の前を忠実に歩むのかということでした。

**○忠実な管理者として生きるために：覚えておくべき四つの原則**

それが今回、私たちが見ようとしているみことばの背後にある重要な問いでした。そして私たちは先週、忠実な管理者として生きていくこと、私たちが覚えておくべき大切な四つの原則の二つを見たのです。

**1. 自分の立場を覚えていること 14節**

私たちが良い管理者として生きていくためには、私たちはまず何よりも自分の立場をしっかりと心に留めていることが大切でした。もっと言えばイエス様が自分の主人であって、自分はその奴隷なのだという立場をいつも正しく覚えていることが重要でした。先週も言いましたけれども、感謝なことに私たちは多くのものを恵みによって主から今も与えられています。ただいつも勘違いしてはいけないことは、日々の生活の中で手にしているものの中で、これは自分のものと言えるようなものは何もないということです。これは自分の好き勝手にできますと言えるものもありませんでした。持ち物にしても、時間にしても、私たちのからだ、私たち自身にしても例外ではありません。私たちが手にしているものはどれをとっても主人であるイエス様の所有物でした。私たちはただその主人から一時的にいろいろなものを預かっているのにすぎない、主のしもべ、奴隷だということでした。

**2. 主人からの信頼を覚えていること 14-15節**

自分の立場を覚えているだけではなく、主人からの信頼を覚えていることが良い管理者として生きていく上で重要なことでした。この中で、旅に出る直前、しもべたちを呼んだ主人は、しもべそれぞれに財産、タラントを預けていました。タラントというのは、その当時の人たちが約16年分働いて得る賃金に相当する非常に高価な価値のあるものでした。奴隷は何も持っていません。主人がすべてを持っていました。その主人が自分が出ていく時に、これを私の代わりに管理しなさいと言って、しもべに託していたのです。主人としもべの間にあったものは、単なる責任だけではありませんでした。そこには主人からしもべに対する愛情や信頼というものがあることを見て取れたのです。これは今の私たちにとっても同じでした。今、私たちが与えられているものは全部自分自身のものではない、これは主のものなのだと思えるだけではなくて、与えられているものは主が自分に信頼して託してくれているものなのだ、感謝していることが大切でした。感謝しているからこそ、自分に託されているものを主のために喜んで使うことが大切でした。

きょうは残りの三つ目と四つ目を一緒に考えてみたいと思います。

### マタイ 25 : 14 - 30

「:14 天の御国は、しもべたちを呼んで、自分の財産を預け、旅に出て行く人のようです。:15 彼は、おのおのその能力に応じて、ひとりには五タラント、ひとりには二タラント、もうひとりには一タラントを渡し、それから旅に出かけた。:16 五タラント預かった者は、すぐに行き、それで商売をして、さらに五タラントもうけた。:17 同様に、二タラント預かった者も、さらに二タラントもうけた。:18 ところが、一タラント預かった者は、出て行くと、地を掘って、その主人の金を隠した。:19 さて、よほどたってから、しもべたちの主人が帰って来て、彼らと清算をした。:20 すると、五タラント預かった者が来て、もう五タラント差し出して言った。『ご主人さま。私に五タラント預けてくださいましたが、ご覧ください。私はさらに五タラントもうけました。』:21 その主人は彼に言った。『よくやった。良い忠実なしもべだ。あなたは、わずかな物に忠実だったから、私はあなたにたくさんの物を任せよう。主人の喜びをともに喜んでくれ。』:22 二タラントの者も来て言った。『ご主人さま。私は二タラント預かりましたが、ご覧ください。さらに二タラントもうけました。』:23 その主人は彼に言った。『よくやった。良い忠実なしもべだ。あなたは、わずかな物に忠実だったから、私はあなたにたくさんの物を任せよう。主人の喜びをともに喜んでくれ。』:24 ところが、一タラント預かっていた者も来て、言った。『ご主人さま。あなたは、蒔かない所から刈り取り、散らさない所から集めるひどい方だとわかっていました。:25 私はこわくなり、出て行って、あなたの一タラントを地の中に隠しておきました。さあどうぞ、これがあなたの物です。』:26 ところが、主人は彼に答えて言った。『悪いなまけ者のしもべだ。私が蒔かない所から刈り取り、散らさない所から集めることを知っていたというのか。:27 だったら、おまえはその私の金を、銀行に預けておくべきだった。そうすれば私は帰って来た時に、利息がついて返してもらえたのだ。:28 だから、そのタラントを彼から取り上げて、それを十タラント持っている者にやりなさい。』:29 だれでも持っている者は、与えられて豊かになり、持たない者は、持っているものまでも取り上げられるのです。:30 役に立たぬしもべは、外の暗やみに追い出さない。そこで泣いて歯ざしりするのです。」

### 3. 自分に託されているものを覚えていること 16 - 18 節

では三つ目の原則から一緒に考えてみましょう。忠実な管理者として生きていく上で大切なことの三つ目は、自分に託されているものを覚えていることです。管理者にとって大切なことは、主人が自分にいったい何を預けてくれているのかということを知覚していることでした。いま一度 15 節から見ると、主人としもべのやりとりがこんなふうになっています。「:15 彼は、おのおのその能力に応じて、ひとりには五タラント、ひとりには二タラント、もうひとりには一タラントを渡し、それから旅に出かけた。:16 五タラント預かった者は、すぐに行き、それで商売をして、さらに五タラントもうけた。:17 同様に、二タラント預かった者も、さらに二タラントもうけた。:18 ところが、一タラント預かった者は、出て行くと、地を掘って、その主人の金を隠した。」と。先週も見ましたが、ここで主人は自分が呼び出したさ 3 人のしもべに対して、それぞれ自分自身の財を預けていました。みんな同じ額だったのではないことに注目してください。「おのおのその能力に応じて」、5 タラント、2 タラント、1 タラントを託していました。違いがあったのです。皆さんもこんな光景を見たことがあるかもしれません。おやつの時間になった時、親が兄弟を呼んで、その弟と兄に別々の量の別々の種類のお菓子を与えようとするのです。するとまだ小さな弟は、自分だけが少ない量を与えられたり、もしくは自分のよりおいしそうなのが兄に与えられているのを見れば、大体決まって、お兄ちゃんだけずるい、不公平だと不満を覚えます。でもよく考えてみると、本来なら弟には不公平だと文句を言う権利はありませんでした。それはすべてのお菓子を持っているのが親だからでした。所有者である親だけがどのお菓子をどれだけ分けるのか好きなように決めることができました。また、親はただ好きなように分けられるだけではありません。自分の子どものことをだれよりも知っているからこそ、親はその子が食べることができる量を与えることもできました。たとえ子どもがもっと

欲しい、もっと欲しいとごねたとしても、親は子のことを愛しているから必要以上には与えないのです。これと同じで、主人である私たちの主は、文字どおりすべてのものの持ち主でした。そしてこの主人ほど私たちのことをご存じのお方はいません。そんなお方が私たちのことを愛して、信頼して、いろいろなものを日々それぞれの能力に応じて託してくれています。であるならば、私たちはほかの誰かと比較して、なんであの人にはあって私にはないのでしょうか、そんな不満を言うことはできないのです。

私たちにできることはただ主に感謝して、自分に託されているものに忠実であることでした。正直になると、私たちは時に、与えられているものにだけ心を奪われることがあります。その結果、ほかの人が持っているものと比べて羨んだり、自分の境遇を嘆いたりすることがあるのです。でも忘れてはいけないことは、私たちに与えられているすべてのものの所有者がだれなのかということです。私たちがそれを手にしているのは、私たちのことをだれよりもご存じの神様が、私たちに必要な分だと預けてくれているものです。だからこそ人と違っていているというのは偶然ではなく、神様のあわれみです。それぞれが忠実に管理することができるために、多過ぎず、少な過ぎない適量を神様はそれぞれに与えているのです。できない量を与えているのではありません。それぞれの能力に応じて、神様は私たちに管理するようにと預けてくれています。それなら私たちは自分自身に託されているものに感謝して、それを主のために忠実に用いることが大切でした。

### ●預かっている“財産”：

では、具体的に神様がひとりひとりに託してくれているものとは何でしょうかというのが、先週最後に考え始めた質問でした。この1週間、考えてみましたか？主のために用いるために、自分が主から何を預かっているのか、その財産を少しでも理解できたでしょうか。正直よくわからなかったという人もいます。なのできょうは、主から与えられる財産を大きく五つの項目から考えてみたいと思います。主が与えてくださる財産は、もちろんこれから見る五つだけではありません。これ以上にたくさんあります。でもすごく大切な五つのをきょうは少し時間をとって考えてみましょう。

#### 1) 生まれながらの能力

一つ目に主が与えてくださる財産は、生まれ持った能力です。この世界に生まれてくる時から持っている能力です。でもこれは私たち自身もよく知っています。人はみな生まれながらにさまざまな違いを持っています。その違いというのは、偶然の産物ではありません。創造主である主が能力も、素質も、才能もそれぞれに持つものとしてひとりひとりを緻密にデザインされました。たとえば生まれながらに音楽の才能を持っている人がいます。私には到底理解できませんけれども、その人は一度何かを耳にすれば、すぐにその曲を再現できたりするのです。ある人は生まれながらに何かを作ったり、何かを書いたりする能力を持っています。不思議にも、手先がとても器用で美しいものを作ることができる人もいます。ほかにも想像力や記憶力に長けている人もいれば、ことばや数字に長けている人、運動能力や力に長けている人、人とのコミュニケーションに長けている人、いろいろな違いがあります。挙げればきりはありません。でもそうやって神様は創造の初めから、私たちを造ったその時からさまざまな能力を財産として託してくれているのです。でもいったい何のためでしょう。それは、その与えられている賜物、才能、能力を訓練して、ほかの人の益や神様の栄光を現すために用いるためでした。だからいろいろな形で私たちは神様の栄光を現すことができるのです。走るのが早いからオリンピック選手になって、オリンピックの場で主の栄光をたたえることを目指している者たちもいます。それだけではなく聖書の中を見れば、音楽家や天幕作りの職人など、さまざまな方法で主に仕えている者たちの姿も見て取れます。いろいろな形で私たちは与えられているものを用いて、主に仕えることができるのです。

では、主はどんな能力を自分に与えてくれているでしょう。あなたは、その託された能力を自分のためではなく、ほかの人や主のためにどうやって用いているでしょう。

#### 2) 霊的賜物

次に、二つ目の財産は霊的賜物です。恵みによって救われた者たちは、神様の恵みによってさまざまな賜物を主から託されています。創造を通して与えられる能力だけではなく、救いを通して霊的な財産までもが与えられているのです。あのペテロもこんなふうに述べていました。I ペテロ 4 : 10 - 11 にこんなふうに書いています。「:10 それぞれが賜物を受けているのですから、神のさまざまな恵みの良い管理者として、その賜物を用いて、互いに仕え合いなさい。:11 語る人があれば、神のことばにふさわしく語り、奉仕する人があれば、神が豊かに備えてくださる力によって、それにふさわしく奉仕しなさい。それは、すべてのことにおいて、イエス・キリストを通して神があがめられるためです。栄光と支配が世々限りなくキリストにありますように。アーメン。」と。一番最初の「それぞれが賜物を受けているのですから」ということばに注目してください。当たり前聞こえると思いますけれども、「それぞれ」というのは「ひとりひとり全員」ということです。つまり言い換えれば、自分の罪を悔い改めてイエス様を自分の救い主、主と信じ受け入れた者の中に、霊的賜物を持っていない人はひとりもないということです。霊的賜物というのは特別な人にだけ与えられるものではありません。うちに御霊を持っている、うちに御霊が住んでいる私たちがみな、救いを通して例外なく手にするものでした。

これと同じ真理をパウロも繰り返し口にしています。I コリント 12 : 7、11 でこんなことばを繰り返しています。「:7 しかし、みな益となるために、おのおのに御霊の現れが与えられているのです。」、「:11 しかし、同一の御霊がこれらすべてのことをなさるのであって、みこころのままに、おのおのにそれぞれの賜物を分け与えてくださるのです。」と。「おのおのに」、「それぞれ」に、私たちはみなそれが与えられているということです。もちろんその現れ方は人それぞれです。ある人は教会において教える賜物を持っています。教える賜物を持っている人は単に自分が聖書を学んで理解するだけではなくて、その真理をほかの人にわかりやすく伝えることに喜びを見いだします。別に講壇から語ることはありません。兄弟姉妹の間で自分が学んだすばらしい真理を教えること、伝えることに喜びを見いだす者たちもいます。ある人は仕える賜物を持っています。この人たちはだれでも必要のあるを見れば、どんな犠牲を払ってでもその人のことを助けたいと、その助ける、仕えることに喜びを見いだします。ある人は勧めや励まし賜物を持っています。そのような者たちは困難の中にいる人たち、苦しみの中にいる人たちを見ればともに痛みや悲しみを分かち合っ、そして神様の約束に立ち返ろうと助けることに喜びを見いだします。聖書はいろいろなことを教えています。これ以外にもいろいろな種類の賜物がローマ 12 章や I コリント 12 章に挙げられています。

霊的な賜物は何ですかという話になると、何でしょうかとずっと聖書とにらめっこすることが多かったですけれども、私たちが霊的賜物を考える上で一番大切なこと、結局覚えておかないといけないことは、これらの賜物が何のために与えられているのかということです。霊的な賜物というのは何のために与えられているのでしょうか。それは自分自身のためではありません。託されている賜物を用いて、互いの信仰の成長のために役立て、そして神様の栄光がそれによって崇められるためでした。矢印はこっちに向いているわけではありません。矢印は外に向いているのです。だからこそ私たちはみな例外なく霊的賜物を持っています。そして置かれている神の家族の中であって、あなただけができるその特別な役割を担っているということです。教会の中でただ観客としてみんながやっていることを見ているだけでいい、そんな人はだれもいません。自分には何もない、自分は役に立ちませんということもありません。救われた時に神様がそれぞれに何かを託しています。そして主から賜物を与えられている私たちはみなほかの人にはできない方法で、ほかの兄弟姉妹の信仰の成長を助けることができるのです。

だからこそ自分の霊的賜物のことを考えるのであれば、考えるべき質問はこれです。兄弟姉妹の成熟のために、どのように自分は仕えることができるのだろうか、自分がどんな助けを与えることが相手だけではなく、自分にとっても喜びになるのだろうかということです。霊的賜物というのは、最初からほかの人の益となるために、何よりも主の栄光を現すために私たちに託されているものでした。ほかの人の

ために使うものです。だからこそ自分が何を持っているかわからなければ、自分のどんな部分が励ましや助けになっていますかと、自分をよく知っている周りの人に聞いてみることです。教える部分に励まされている人もいるかもしれません。慰めることに励ましを見いだされている人もいるかもしれません。仕えることに励ましを見いだされている人もいるかもしれません。そんなことを聞いてみることです。生まれ持った能力も、霊的な賜物もどちらも持っているだけで終わりではありませんでした。それは主から信頼して使うようにと託されているすばらしい財産でした。

### 3) 時間

次に三つ目の財産は時間です。私たちは1日に24時間、1週間であれば168時間与えられています。果たしてそれらを主人のためにどのように使おうと日々生きているでしょう。時間について考える時、私たちは少なくとも二つの事実を覚えることができます。一つは自分にどれだけの時間が残されているのか、だれもわからないということです。私たちが時間について考える時に、私たち自身が覚えていられることは、まず自分にどれだけの時間が与えられているのか、残されているのか、だれもわからないということです。普段はあんまり気にしないかもしれません。当たり前のように次の日が来て、次の月が来て、また次の年が来ると私たちは思い込んでいるかもしれません。でもみことばは何度も何度も次の瞬間があるのかはだれにもわかりませんと警告し続けていました。箴言27:1にも「あすのことを誇るな。一日のうちに何が起こるか、あなたは知らないからだ。」と書いています。ここにいるだれも次があるのかわかりません。この地上で与えられている時間というのは、いつまでも無限にあるものではありません。忘れてはいけません、短く限りあるものでした。

また、もう一つは、時間というのは一度過ぎ去ってしまえば、もう二度と帰ってこないということです。これはもう当たり前ですけども、大切なことです。残念ながらタイムマシンはないのです。だからこそその時その時にいろいろな機会が与えられているのであれば、そのいろいろな機会を賢く使ってむだにしてはいけません。エペソ5:15-17にもこんなふうに書いています。「:15 そういうわけですから、賢くない人のようにではなく、賢い人のように歩んでいるかどうか、よくよく注意し、:16 機会を十分に生かして用いなさい。悪い時代だからです。:17 ですから、愚かにならないで、主のみこころは何であるかを、よく悟りなさい。」と。機会というのは限られたものでした。時間というものは限られているものでした。だとすれば、その限られた時間の中にあって、普段どのように知恵をもって人に仕え、主の栄光を現そうとしているのでしょうか。どんなふうに関心を持って自分自身のスケジュールを立てているのでしょうか。いろいろなことが私たちに大切で、たとえば主のために自分自身のからだを管理する、それも大切です。だからこそ睡眠や食事の時間も必要になります。家族を養うために働く時間も必要になりますし、男性として妻を愛したり、子どもと時間をとって子どもを導くのに時間もかかります。女性として夫に仕えて、また子どもを世話するのに時間もかかります。教会での奉仕にも時間がかかるし、兄弟姉妹との間を深めていくのに時間もかかるし、神様と自分自身が個人的な時間を取ることもちろん欠かせない時間になります。与えられているのは本当に短い時間です。そして本当に短いその時間の中で、おのおのが与えられている務めを忠実になしていくことが求められるのです。そのように歩んでいこうとするのであれば、確実に言えることがあります。それは忠実な管理者というのは、受け身にはなれないということです。ただなんとなく1日を過ごして行って、ただなんとなくいろいろな人と過ごして、ただなんとなく機会を失うような者であってははいけません。主のみこころが何なのかということ、いつもみことばを通して考え、追い求め、自分に与えられている今を、喜んで主人のために使うことが大切でした。

### 4) 持ち物、特にお金

次に、四つ目の財産は持ち物、特にお金です。聖書がどれくらい持ち物やお金に関して教えているか知っていますか？たとえば福音書には、38のたとえ話が出てきますけれども、実に16がお金や持ち物の扱い方に関係しています。聖書全体を見る時に、祈りについて触れられているのは約650回ぐらい、

信仰について触れられているのは約500回ぐらいです。ではお金について触れられているのは約2000回以上でした。驚きではありません？聖書を見渡す時に、多くの場所でみことばはこのお金、持ち物というテーマについて語り続けているのです。それはイエス様も言われていました。宝のあるところにその人の心もあるからでした。管理者として私たちがどのようにお金を用いようとするのか、持ち物を用いようとするのかということ、そこには私たちの希望や信頼というものがどこに置かれているのかを明白にしてくれる、そんな助けがあります。

よく考えてみてください。本来であれば、お金も私たちのものではないということをよく知っています。それもすべて神様が持っているものです。ハガイ2：18にも「銀はわたしのもの。金もわたしのもの。——万軍の【主】の御告げ——」と書いていました。この事実は頭ではよくわかっていますが、私たちはどれほど容易に所有者である神様ではなく、預かっているお金に自分の安心や喜びを見いだそうとしているでしょう。それが自分の手元から離れていくことを見る時に、私たちはどれほど強い抵抗感や不安を覚えたりするのでしょうか。頭ではわかっています。でも気づかないうちに、私たちはいろいろな場面でお金に安心を求めて、お金の将来を託し、お金の価値を見いだしていることがあります。私たちはただ管理者として一時的に主から宝を任されているに過ぎないということを忘れてはいけません。預かっているものは自分のものではありません。主はそれを取り上げることも、また増し加えることもできます。だからこそ私たちは預かっている財産を愛するのではなく、預けてくれている主を愛し続けることが大切でした。

そして感謝なのは、本来そうやってすべての所有者である主に身をゆだねていく生き方こそ、私たちにとっては本当の満足を与えてくれるものでした。ヘブル13章にこんなことばが記されています。先週いろいろなことを考えている中で、自分もこの箇所を心に留めました。金銭を愛する生活をしないためにはどうしたらいいのか、今持っているもので満足する者として成長するためにはどうしたらいいのか、ヘブル13：5-6にこう書いています。「：5 金銭を愛する生活をしてはいけません。いま持っているもので満足しなさい。主ご自身がこう言われるのです。「わたしは決してあなたを離れず、また、あなたを捨てない。」：6 そこで、私たちは確信に満ちてこう言います。「主は私の助け手です。私は恐れません。人間が、私に対して何ができましよう。」」と。覚えていることです。すべての所有者である主がいつも私たちのことを離れずに、いつも私たちのことを捨てないと約束してくれていました。だとすると、私たちの責任は託されているもの、持ち物であれば持ち物、お金であればお金、いろいろなものを主の栄光のために用いることでした。

## 5) 福音

そして最後に五つ目の財産は福音です。これまで見てきた財産は、どれも私たちに値しないすばらしいものに違いありません。でもこの最後の財産はあまりにも驚くべきものでした。こんなことばをパウロがⅡコリントに記しています。Ⅱコリント5：18-20に、主が私たちに託してくれたすごい務めが書かれています。「：18 これらのことはすべて、神から出ているのです。神は、キリストによって、私たちをご自分と和解させ、また和解の務めを私たちに与えてくださいました。：19 すなわち、神は、キリストにあって、この世をご自分と和解させ、違反行為の責めを人々に負わせないで、和解のことばを私たちにゆだねられたのです。：20 こういうわけで、私たちはキリストの使節なのです。ちょうど神が私たちを通して懇願しておられるようです。私たちは、キリストに代わって、あなたがたに願います。神の和解を受け入れなさい。」と。すごいことが書いてありました。私たちはかつて神様にかたくなに逆らう敵として歩んでいました。罪に罪を重ねて主の栄光を汚していた私たちにふさわしかったのは永遠の滅びでした。でもそんな罪深い私たちを神様はキリストにあってご自分と和解させてくださっただけでなく、その上でキリストを代表する使節としての特権を与えてくださったのです。敵として歩んでいた者が先頭に立って、主のすばらしさを、罪の赦しの喜びを伝える者として私たちを召してくださったということです。私たちに和解のことばをゆだ

ねられたのです。すごい特権だと思いませんか？預かっているものの価値を忘れないことです。恵みを知った管理者として、私たちは感謝して忠実にこのキリストの福音を語り続けていくことができます。

最初にも言いましたけれども、ほかにもいろいろなことを挙げるすることができます。恵みによって主は私たちに必要な分だけ、私たちの能力に応じて託してくれています。それが何かを、私たちはいつも覚えてそして覚えるだけではなく、それを用いて主の栄光を現していくこと、それが忠実な管理者に問われる三つ目の原則でした。

#### 4. 将来の報いを覚えていること 19-30節

そして最後に四つ目です。そのように託されたものに忠実なしもべには大きな祝福が用意されています。管理者として生きていく上で大切な四つ目の原則は、将来の報いを覚えていることです。マタイ25：19-23に、長旅を終えて帰ってきた主人としもべとのやりとりがこう記されていました。「：19 さて、よほどたってから、しもべたちの主人が帰って来て、彼らと清算をした。：20 すると、五タラント預かった者が来て、もう五タラント差し出して言った。『ご主人さま。私に五タラント預けてくださいましたが、ご覧ください。私はさらに五タラントもうけました。』：21 その主人は彼に言った。『よくやった。良い忠実なしもべだ。あなたは、わずかな物に忠実だったから、私はあなたにたくさんの物を任せよう。主人の喜びをともに喜んでくれ。』：22 二タラントの者も来て言った。『ご主人さま。私は二タラント預かりましたが、ご覧ください。さらに二タラントもうけました。』：23 その主人は彼に言った。『よくやった。良い忠実なしもべだ。あなたは、わずかな物に忠実だったから、私はあなたにたくさんの物を任せよう。主人の喜びをともに喜んでくれ。』」と。5タラント預かった者と2タラント預かった者、彼らはどちらも最初から最後まで忠実でした。彼らは主人から財産を託されるとすぐに行動に移していました。自分のことを信頼して、愛して、多くを任せてくれた主人を喜ばせたいという思いでもって、主人のために積極的に働いていました。言えるのは、彼らは愛する主人がいつ帰ってくるのかわからなかったとしても、帰ってくると知っていたからこそ、いつ戻ってきてても良い準備というものが整っていたということです。

そしてそれだからこそそんな彼らの忠実な歩みに対して、戻ってきた主人はすばらしい報いを与えられていました。21節と23節に「よくやった。良い忠実なしもべだ」と同じことばが繰り返されています。忠実に歩む者に与えられる報いの一つは、「よくやった」と称賛があるということです。想像してみてください。すばらしい日ではありません？私たちが愛して信頼して多くを託して下さった主にお会いして、それだけではありません、この方が私たちの働きを微笑みをもってよくやった、最後まで忠実に歩んだと言ってくれるのです。忠実に歩む者には主からの称賛がありました。

またそれに加えて、その次こんなふうにも書いています。「あなたは、わずかな物に忠実だったから、私はあなたにたくさんの物を任せよう。」と。称賛だけではありません、忠実に歩んだ者にはさらに財産も増し加えられるのです。でもよく考えてみてください。主人がしもべたちに託したものは、わずかな、些細なものではありませんでした。私たちの目で見れば、主人が託したタラントというのは、1タラントでも最低でも約16年働いて得られるような対価、賃金でした。主人がしもべに託したものというのは些細なものではなく、あまりにも高価な多くのものだったのです。でも同時に、その財産は主人の目から見れば、わずかなものにすぎないと主人は言うのです。忠実な人に用意されている天での財産、資産と比べるのであれば、地上でのそんな一時的な財産も大したことのない量なのだというのです。だからどんなものかは私もよくわかりません。でもこれを聞いただけでも楽しみになりますか？私たちはいつの日か愛する主とお会いする日がやってきます。そこでよくやったと言ってくれるだけでなく、増し加えられるすばらしい祝福や誉れというものも、そこに用意されているのです。忠実に歩む者にはそのようなすばらしい報いがありました。

そしてそれに加えて、最後に21、23節でこう締めくくられてました。「主人の喜びをともに喜んでくれ」と。そこには本当の大きな喜びもありました。忠実な者には喜びが与えられるのです。主人はしもべ

を招いてました。忠実に歩めば、その先には主人とともに喜びを分かち合うことができるというすばらしい特権が与えられていました。今の私たちにはなかなか想像できません。私たちの喜びは波がありますが、この「喜び」はいつまでも途絶えることはありませんでした。かつてダビデも主の御前にある喜びに関して、こんなことばを残しています。詩篇16：11にこう書いていました。「あなたは私に、いのちの道を知らせてくださいます。あなたの御前には喜びが満ち、あなたの右には、楽しみがとこしえにあります。」と。恵みによって救われて、与えられたものを忠実に管理する管理者として歩む者に待っているものは、永遠に続く主との交わりでした。主にある楽しみでした。忠実に歩む者には、希望に満ちあふれたすばらしい将来が待っていると言うのです。そしてそんな日がやってくることを心待ちにするのであれば、その日が来るまでの間、私たちには問われることがありました。託されたものを感謝をもって誠実に扱って、主の栄光を現すために用いていくことです。忠実なしもべにはすばらしい報いが待っていました。

でも同時に、すべてのしもべが祝福に預かるのではありません。不誠実な悪いしもべにはその歩みにふさわしいさばきが最後に用意されていました。続きに、今回のたとえの悲劇的な結末がこう記されています。24節から最後までこう書いています。「:24 ところが、一タラント預かっていた者も来て、言った。

『ご主人さま。あなたは、蒔かない所から刈り取り、散らさない所から集めるひどい方だとわかっていました。:25 私はこわくなり、出て行って、あなたの一タラントを地の中に隠しておきました。さあどうぞ、これがあなたの物です。』:26 ところが、主人は彼に答えて言った。『悪いなまけ者のしもべだ。私が蒔かない所から刈り取り、散らさない所から集めることを知っていたというのか。:27 だったら、おまえはその私の金を、銀行に預けておくべきだった。そうすれば私は帰って来たときに、利息がついて返してもらえたのだ。:28 だから、そのタラントを彼から取り上げて、それを十タラント持っている者にやりなさい。』:29 だれでも持っている者は、与えられて豊かになり、持たない者は、持っているものまでも取り上げられるのです。:30 役に立たぬしもべは、外の暗やみに追い出さなさい。そこで泣いて歯ぎしりするのです。』と。最後に主人のもとにやってきたのは1タラントの財産を託されていたしもべでした。もしかしたら今回のこのたとえ話を読んでこんなふうに思ったことがあるかもしれません。このしもべは別に財産をすべて使い果たしたのでもないし、一部を失ってなくしてしまったのでもない。ただ使わずに土に埋めていただけ。それはそもそもそんなに悪いことなのでしょうかと。もしそんなふうに思ったのであれば、よく知っていてください。このしもべが問題だったのは、単に地面に埋めたことではありません。ある意味、この当時の社会において、安全のために高価な貴重品を土に埋めるというのは習慣でもありました。では何が問題だったのかと言うと、彼の取った行動ではなく、それを行った心でした。最後のしもべは、主人から託された責任というものを初めから果たそうといっさいしませんでした。恵みによって与えられているものを感謝して喜んで、そしてそれを主のために用いようと全くしませんでした。またあろうことか、帰ってきた主人に自分自身の不忠実な責任をなすりつけていたのです。彼は言っていました。「ご主人さま。あなたは、蒔かない所から刈り取り、散らさない所から集めるひどい方だとわかっていました。:25 私はこわくなり……」と。彼が言わんとしたことはこういうことでした。あなたが理不尽でひどい主人であることを私は知っているのです。だから怖かったから、託されたものを忠実に扱うことができませんでしたと。この態度に何が現れているでしょう。このしもべは最初から主人のことも、主人の益になることも、どちらにも何の興味も持っていませんでした。多くの恵みが与えられていたとしても、そのすべての所有者である主人を愛して、主人に従おうとすることはしませんでした。その心の中にはかたくなに信じない思いがあったのです。

だからこそそんな彼に値する厳しいさばきをイエス様は最後に述べていました。30節のところで「役に立たぬしもべは、外の暗やみに追い出さなさい。そこで泣いて歯ぎしりするのです。」と言ったのです。ここで光のない外の暗やみというのは、火に燃える地獄のことです。自分に与えられているものに感謝もせず、忠実に用いずに、そしてそれを与えた神様のことを最初から拒み続けているような者にふさわしいのは、ただ悲しみと苦痛に満ちた永遠のさばきだけでした。みことばは教えていました。天に戻られ

たイエス様はいつの日か再び帰ってこられます。私たちがみんなこの方の前に立つ日は遅かれ早かれやってくる。そしてその時に、私たちが耳にすることばは「よくやった。良い忠実なしもべだ。……主人の喜びをともに喜んでくれ。」か「役に立たぬしもべは、外の暗やみに追い出しなさい。」のどちらかしかありません。だからこそ改めてよく考えてみてください。私たちは主から託されているものを忠実に管理する者として、今歩んでいるでしょうか。良い管理者として生きていくことは、何もその良い行いが救いをもたらすからではありません。これまでも何度も見てきたように、救いというのは、いつも変わらずに、イエス・キリストを信じる信仰によってのみ、神様の恵みによってのみのものでした。ただ、同じようにみことばが語り続けてきたことは、真の救いはいつも主に従って、主の栄光を現したいという良い行いを必ず伴うものだということです。主から受けたものの、主から預かっているもののあまりのすばらしい価値に、恵みに気づいた者がいるのであれば、その者はそれを何もせずに黙っていることなどできません。それを喜んでほかの人や神様のために用いようとする。救われて、感謝している者の生き方は、与えられているものを忠実に、主のために用いようとする生き方でした。自分に託されているものに対して、忠実であることをずっと拒み続け、主人のためにいっさい使おうとせず、土の中に埋めたままにいて、そんなふうに進める信仰者はだれひとりとしていません。

私たちはみんな主人である神様から託されたものに忠実であることが求められています。主の日がいつ来るのか、明日来るのか、3時間後に来るのかわからないと、本当に信じているのであれば、私たちは今与えられているこの時に、託されたものを積極的に用いていくことです。ここにいるひとりひとりいろいろな役割が与えられています。いろいろなものが託されています。自分自身のことについても、家庭においても、教会においても、仕事場においても、それぞれに預かっている大切な責任があります。務めがあります。それは神様がそれぞれに信頼して託してくれているものです。だとしたらその信頼して託してくださっている主に会う日を心に留めて、失敗しても、悔い改めて主の助けを祈り求めながら、忠実な管理者として、主の栄光を現す者としてともに成長していきましょう。